

黒ねこ作
Illustrated by サボテン

艦隊Collection

シャドウフリート
影の艦隊

KANTAI COLLECTION FANBOOK

KANTAI COLLECTION FANBOOK
SHADOW FLEET
－ 影の艦隊 －

黒ねこ作
表紙・挿絵／ただのサボテン

目次

プロローグ	【006】
-------	-------

第一章 影の艦隊	【020】
----------	-------

第二章 加古	【044】
--------	-------

第三章 彷徨う心	【068】
----------	-------

第四章 死闘の果てに	【096】
------------	-------

エピローグ	【146】
-------	-------

あとがき	【150】
------	-------

民間軍事会社『海神』の遊撃艦隊群。

それが“影の艦隊”である。

あらゆる理由と事情を抱えた艦娘が『海神』に雇われたとき、
彼女達は“傭兵艦娘”となり報酬のために命を賭ける。

『海神』遊撃艦隊群・第一艦隊

【古鷹(改二)】

第一艦隊の傭兵艦娘、秘書艦

【長門(改二)】

第一艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の総旗艦、提督代行

【加賀(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、エアカバー担当

【天龍(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、斬り込み担当

【陽炎(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、天龍の部下

【不知火(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、天龍の補佐

【摩耶(改二)】

第二艦隊の旗艦、古参の傭兵艦娘。

【吹雪(改)】

第二艦隊の傭兵艦娘、摩耶の補佐

【木曾(改二)】

第四艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の作戦参謀

【電(改)】

第四艦隊の傭兵艦娘、遊撃艦隊群の作戦参謀補佐

【陸奥(改)】

強襲揚陸潜水艦『海神』の艦長、長門の妹艦。

【明石】

『海神』技術開発課の課長、整備班の班長

【大淀(改)】

帝國海軍参謀本部の特務監察艦

【加古】

古鷹の妹艦。二年間、植物状態で生きている。

【來栖誠二（クルスセイジ）】

民間軍事会社『海神』の社長、元帝國海軍少将

「……………加古……………ごめんね。先に逝くね……………」

プロローグ

夜明け前、フィリピン海を静寂が支配していた。

南洋のねっとりした生暖かい風が吹き、わずかな星明かりも雲群に遮られる。黒い海はあらゆる輝きを奪いとられ、怪物の蠢動を彷彿とさせる不気味なうねりを繰り返した。

古鷹は波間をぼんやり眺めて独り言ちる。

——どうして、私は戦っているんだろう？

昔、どこかの艦娘が口にした模範解答が脳裏へ浮かぶ。

人類を脅かす「深海棲艦」を倒し、平和な海を一日でも早く取り戻すため。

それも間違いないじゃない。深海棲艦と呼ばれる（人類が勝手に命名した）人類に敵対的な異種生命体は、約八十年も世界の海洋を侵蝕して様々な被害をもたらしてきた。

でも、私は違う。どこまでも個人的な理由で戦っている。

……加古、どんな夢みてるのかな。

きつと純白の棺桶じみた医療カプセルで今日も安らかに眠っている。

7 プロローグ (試読サンプル)

生命維持に必要なチューブで繋がれて、王子の口づけを待つように横たわっている。
古鷹は加古いもろこを守れなかった。だから今も戦っている――。

「――鷹。おい！ 古鷹！」

力強く肩を揺さぶられ、古鷹は夢現から覚めたように我へ返った。コールタールじみた水面は相変わらず波打ち、自分を含む“艦娘”が白い軌跡を描いて航行する。

ちらりと右を向けば、仲間の物言いたげな呆れ顔がある。前髪で隠れた左眼にトレードマークの眼帯、鼻筋へ横一文字の刀傷が走った天龍型軽巡洋艦一番艦――天龍だ。

「お目覚めか？ いくら呼んでも返事がねえから来ちまったぜ」

黒いカーディガンとミニスカート。女子高生じみた格好だが、これでも防弾防刃と耐火機能の付いた戦闘服である。古鷹の着用するセーラー服も同様の性能を備えていた。

「ごめんなさい。ぼーっとしてたみたいですね……」

これ見よがしな溜息をつき、天龍は右腰へ帯びた対艦刀の柄に手をのせた。

「別にいいけどよ。ボサツとしてっと即死だぜ」

「……ですね」

「あと長門が呼んでた」

大型艦装を付けた艦娘が五〇〇メートル前にいる。美しい漆黒の長髪と陣羽織めいた

コートの裾を風に靡かせた改二のビッグセブン。長門型戦艦一番艦の長門だ。

彼女からの呼び出しということは、たぶん対象が発見できたのだろう。日本帝國海軍の輸送艦二隻を救援する。輸送艦へ群がる敵を排撃して報酬を稼ぐ簡単な仕事だった。

ポキポキと首を鳴らし、天龍がニヤリと口端を上げる。

「じゃ、用件は伝えたからな！ オレはガッツリ稼ぎに行くぜ！」

「気をつけてくださいね」

「へっ。このオレが簡単にくだばるかよ」

じゃあな、と古鷹の肩を押して遠ざかる。すると彼女を待っていたらしい陽炎型駆逐艦の陽炎と不知火が追従した。二人とも天龍の部下であり、不知火は補佐を務めている。

古鷹も波を切って長門の右隣を併走した。

「お待ちせしました」

「ん。どうやら身体に魂が戻ったようだな」

「すみません……」

長門は右頬に古傷の刻まれた顔で苦笑する。

「まあいい。どうだ、加賀」

長門の左隣、青い袴姿の加賀型正規空母・加賀が目を閉じたまま答えた。

9 プロローグ (試読サンプル)

「——まだよ。あと少しで二号機が割り出すわ」

「しかし呆れたものだ。正確な位置も判らず依頼を出すとはな……」

月明かりすらない暗夜、フィリピン、マリアナ、パラオと三つの諸島へ囲まれた海域を搜索し、輸送艦二隻を深海棲艦から救助せよ。挙句、帝國海軍からは矢の催促だ。

艦載機による搜索も夜間では効果を望めない。となれば、各艦娘の艤装と夜間偵察機のレーダーを頼るしかない。加賀の“二号機”とは、九八式夜間偵察機を指していた。

「いっそ追加料金を請求したら？」

「考えておこう。次も連中が迷子になるようならな」

古鷹は長門の皮肉へ両肩を竦めて応える。帝國海軍の関係者が聞いていれば間違いない顔を真つ赤にして激怒するだろうが、この艦隊においてはごく普通の雑談だ。

本来、艦娘は各国海軍の保有する次世代人型機動兵器であり、人類と九十パーセントは一致する肉体を持つ人造人間だ。故に、日本の艦娘なら日本帝國海軍の所屬となる。

ただし、民間軍事会社『海神』へ籍を置く艦娘は違う。あらゆる理由や事情を抱えて『海神』に雇われた者は“傭兵艦娘”となり、己が目的のために危険な戦場を選ぶ。

傭兵艦娘に大義や正義はない。一度の仕事で得られる報酬が全てだ。

加賀がずっと目蓋を開けた。

「見つけた。戦術情報統合システムへ座標を上げるわ」

古鷹の眼前で〈情報更新〉の文字が踊る。

艦娘は人間よりも肉体が強化されているだけでなく軍事機器の塊でもあった。

例えば、角膜表面の涙で形成した薄膜はナノディスプレイとなり、体の脊椎から腰椎にかけて疑似神経接続部があるおかげで、艦娘は衣類越しでも艤装を装着できる。

加えて、戦術演算装置「フェアリーユニット」が脳に埋め込んである。戦闘管制AIの「妖精」が、艦娘の艤装接続を確認すると戦闘中の行動を補佐してくれるのだ。

この「妖精」は使用者をデフォルメ化した姿をしている。長門や加賀も己の分身めいた妖精を肩へ乗せているし、古鷹も立体映像の妖精を左肩に座らせていた。

「全艦、速度を上げろ！ 遅れるな！」

長門の命令で第二戦速から最大戦速へシフトする。足部艤装で海を裂き、派手な白波を散らしながら指定座標を目指す。古鷹の妖精は急に腰を上げて空を指さした。

古鷹が目線を動かして眉根を寄せる。

「長門さん。あれは……」

「ああ。遅かったな」

かがり火のごとく炎上する輸送艦が夜空を朱に染めていた。

11 プロローグ (試読サンプル)

ゴムの焼ける異臭が漂い、ツンとくる火薬臭は血臭を纏って鼻腔の奥を刺激する。

事前情報だと、帝國海軍の艦娘六体が海上護衛で輸送艦二隻へついていた。

しかし、敵味方識別装置に味方のシグナルはない。当然と言えば当然だろう。

輸送艦の周囲で大量の敵群が犇めいていた。ゆらゆらと蜃気楼のごとく揺らいだ炎の向こうで、魚類もどきの醜惡な怪物が人型だった何かを噛み砕いて咀嚼する。

深海棲艦。その中でも人類が「駆逐クラス」と定義した敵だ。

妖精が照合結果を出した。重巡り級五、輕巡ホ級七、ト級六、輸送ワ級四、駆逐イ級を主体とした駆逐クラスが二百体強。赤眼の優性個体と黄眼の完全個体が混じっている。

そこらの雑魚と一線を画した個体は報酬も大きい。わりと稼げる敵群のようだ。長門は東の空を見ながら頷いた。

「天龍。タイムリミットは十分後の日の出までだ」

『ケチるんじゃないよ！ オレに全部食わせろ！』

「留まりたいか？ 私は別にかまわんぞ」

『……あ？ どういう意味だ？』

加賀が涼しげな表情で返答を代わる。

「あなたの頭上に二五〇キロ爆弾を落としてもいいのなら。そういう意味よ」

陽炎と不知火もさりと突き放した。

『あ、私とぬいぬいは時間通り逃げますね!』

『私も心中は謹んでお断りします。お一人どうぞ』

自分の部下にも見限られ、天龍が『ぐぬぬ……』と唸って舌打ちした。

『うっせえ! 十分に引き上げりや文句ねえんだろ! クソッ!』

古鷹にも天龍の不満は理解できる。遠距離攻撃が可能な二人と違って、天龍達は敵群へ切り込むしか攻撃手段がない。だからこそ、長く居残って稼ぎたいのが本音だろう。

やれやれと首を振り、長門が言い添えた。

『安心しろ。今度たつぷり稼がせてやる』

『え、本当かつ! 絶対だぞ!』

右腕へ装着した主砲の安全装置を外し、古鷹は長門へ頷いて見せた。

『全艦! 深海の下の生物に分を弁えさせろ!』

41センチ三連装砲四門の仰角を調整し、長門は火蓋を切って落とした。

『全主砲、斉射! てえーッ!』

瞬間、鮮やかな発砲炎が闇夜を照らす。鼓膜を破るような轟音が響き、輸送艦へ群がるイ級を区別なく吹き飛ばし、黒い肉片が水柱へと飲まれる。敵も一斉に動き始めた。

13 プロローグ (試読サンプル)

『ぬいぬい！ カバー！』

『姉さん。その呼び方は止めてと何度いえば……』

こちらへ紡錘陣形で迫る敵群の横っ腹を、天龍達は先回りで食い破る。

『天龍様の攻撃だッ！ うっしやあ！』

対艦刀を袈裟懸けに下ろして眼前の二体を斬り、反した刃を横薙ぎに振るって複数体を一太刀で始末する。小技や型すらない、どこまでも獰猛で豪快な刀捌きだ。

一方、陽炎と不知火は背中合わせで互いの死角を補う。

『あ、ぬいぬい左っ！ そっちのはもらったわっ！』

『だから姉さん。……チッ。沈め！』

陽炎が天龍の背後を狙うイ級を叩き、不知火は彼女の撃ち漏らしを精確に葬る。

12・7センチ連装砲が火を噴くたびに敵が沈む。とても雑談をしながらとは思えない連携攻撃。しかも通り抜けざまに放った魚雷は、三、四体を巻き込んで始末する。

こちらにも三人を眺めている場合じゃない。古鷹の妖精が西を指さした。およそ三十キロ前後の距離だろう。水面下へ潜んでいた敵群がゆっくり浮かび上がって来る。

加賀から着弾観測を聞きつつ、長門は新手の確認など不要とばかりに命じた。
「古鷹。そちらは任せたぞ」

三十体ほどの敵群を単艦で片付けろという意味だ。この艦隊では珍しくもない。古鷹が右腕の主砲を構えて進撃する。

「了解。古鷹、突撃します！」

妖精が最適な戦闘機動を計算。足部擬装の舵がオートで調整され、トランプのスピードマークに似た魚鱗陣で押し迫る敵の右から回り込む。視界の照準点が敵をロック――。

「……敵群捕捉。主砲狙って、撃てえー！」

20・3センチ連装砲が眩い発砲炎を散らした。

敵群側面のイ級に砲弾が着弾。二、三体の肉体がまとめて破碎され、荒波のような爆炎が横風を受けて広がる。が、深海棲艦として馬鹿ではない。瞬時に回頭を始めた。

古鷹は次弾を撃ちながら目を細める。重巡り級の完全個体が陣形中央で他の個体から守られていた。ほぼ間違いない旗艦だろう。あの手の司令塔がいる群体は厄介だ。

でも、完全個体が一体いるかいないかでは報酬の差も大きい。悪くない。

古鷹が左眼の探照灯機能を使う。ビーム光が刃のごとく真っ暗な海を薙いだ。

「見つけた。これでもう逃がさない」

正確な位置が判明すると同時に、醜い姿を暴かれた敵群が逆探知からの砲撃を見舞う。派手な水柱が何本も立ち、古鷹が縫うように回避しつつ連続で発砲。水飛沫を突き破り、

15 プロログ (試読サンプル)

古鷹の射線上へ身を曝してしまったイ級は、前頭部を木っ端微塵に潰されて斃れた。

アーム可動式な左肩後ろの主砲が、接敵した敵の脇腹を容赦なくぶち抜いた。

青黒い体液が煙霧となり、未熟な発声器官しか持たないイ級の断末魔が響く。たゆたう不揃いな骸を蹴り飛ばし、古鷹は冷徹な照準で敵を撃沈に追い込んでいった。

彼女の視界右下に時計とカウンタがある。撤退時刻と撃沈数を確認するためだ。

加賀さんの爆撃開始まで残り七分。あとは――。

イ級五体と旗艦のリ級のみ。一斉に飛びかかるイ級を急速後退でかわす。

25ミリ連装機銃で弾幕を張り、両股の発射管から魚雷八発を放った。61センチ酸素魚雷が放射状に雷跡を描き、各個体の横っ腹や尾ヒレを食らって爆裂する。

本来、古鷹型艦娘の魚雷発射管は一人につき一つしかない。だが、加古の艦装から流用した魚雷発射管を左足にも付けた古鷹は、漆黒と白銀の発射管を装備していた。

加古の分まで自分が戦う。それが古鷹なりの決意であり贖罪であった。

濃い硝煙を纏った砲煙が霧のごとく流れる。リ級の黄色い両眼が睨んでいた。深海棲艦は上位個体であるほど感情があるという。あの瞳に浮かぶのは憎悪というわけだ。

古鷹が推進装置へ最大加速を命じる。リ級の左腕が火を噴き、巨大な顎を彷彿とさせる武装から連続で砲弾が吐き出された。それを最大戦速で滑走しながらやり過ごす。

妖精が警告を発した。古鷹が身体を捻り、足部艤装の舵を強引に切る。ほとんど横滑りな機動から至近弾を回避。高々と上がった水柱の飛沫が撥ねて制服を濡らした。

しかし、その冷たさへ顔を顰めている暇はない。

リ級が間隙を利用して接近を図る。古鷹は危険な状況でありながら感心してしまった。やはりフラグシップなだけあって即応性が高い。それでも詰めは些か甘いようだ。

古鷹は海上を舐めるように突き進む。身体の重心を右へ落とし、リ級の砲撃をギリギリでかわすも左頬が裂ける。砲弾の風が鎌鼬となったのだ。血の珠が後ろへ吹っ飛ぶ。

ところが、リ級は直撃を狙っていたらしい。怯んだ刹那に隙が生まれる。わざと左足の水流ジェットを一瞬停止させ、古鷹は右足を引くように動かして敵の側面へ滑った。

普通の機動ではないドリフト運動。リ級の右眼が驚愕へ彩られる。

20・3センチ連装砲が哀れな標的を捉えた。

「——これが、重巡洋艦なんですよ」

直後、リ級の瞳は業炎を視た。頭どころか腹から上が丸ごと爆ぜる。どろりとした青い血に濡れた臓物がばら撒かれ、灰色の皮膚片と不快な生臭さが風に乗って失せた。

重巡リ級の下半身が崩れ落ち、古鷹の視界でタイマーのカウントがゼロを告げる。

日の出の輝きが地平線を染めた。

17 プロローグ (試読サンプル)

『時間だ！ 全艦退けッ！』

足部艤装の排水方向を逆流させ、古鷹がその場から急速離脱を図る。天龍達も沈め損ねた個体の砲撃を避けながら退いてゆく。すると頭上を白色の編隊が過ぎていった。

九九式艦上爆撃機だ。

加賀の艦載機であり通常武装である。

こちらの後退へ勢いづく敵が理由を悟った頃にはもう遅い。加賀の制御する九九艦爆が直上からの急降下爆撃を行い、あらゆる個体を無慈悲な爆発で屠殺した。

空母艦娘の艦載機は“思考制御艦載機”と呼ばれ、艦娘の脳波と艦載機の制御を同調させることで操っていた。ちなみに、重巡と軽巡も偵察機を少数なら制御できる。

加賀の航空攻撃は残敵を確実に葬った。広大な大海原を流されてゆくのは、原型もわからぬほど破壊し尽くされた深海棲艦。十分足らずの掃討戦は圧勝で幕を下ろした。

ふと視線を右へやれば、天龍が対艦刀を肩に預けて煙草を吸っている。その隣で陽炎が欠伸を噛み殺し、不知火はポーカーフェイスで汚れた手袋を新品に取り替える。

これにて依頼は完了。いつもと変わらない、傭兵艦娘の仕事終わりだ。

長門はシガレットケースから葉巻煙草ドライシガーを抜いて啜える。

ブラックストーン。チェリーフレーザーが特徴の甘い香りがするシガリロだ。

加賀が氣を利かせて火を点けた。

「終わってしまえば呆氣ないものだ」

「ええ。けれど、おかしい依頼だったわ」

「まったくだ。帝國海軍の連中が何か……ん？」

長門が紫煙を吐き、インカムを押さえて何度か頷いた。全員に会話が聞こえないということは、別回線を使った通信だろう。古鷹は傍に寄って機関を停止させた。

「厄介事トラブルですか？」

「陸奥だ。輸送艦に用があるから近場へ来るそうだ」

「輸送艦に……？」

「まあ何をするかは検討がつく。一服して待っている」

そうですか、と古鷹も制服のポケットから煙草を取った。トントンと箱を叩いて出てきた一本を啜える。ウィストン・キャスター・ホワイト5。加古の愛煙した銘柄だ。

加古のオイルライターで火を点け、ゆつたり舌で煙を味わう。ふんわりとバナナ風味の人工的な甘さが口内へ広がり、やがてタバコ独特の香ばしさと酸味が混じり出す。

天龍が古鷹の肩を軽く小突いた。

「よう。ぼーっとしてた割には良い動きしてたじゃねえか」

「普通だと思えますけど……」

「へいへい。リ級のフラグシップを吹っ飛ばしといてよく言うぜ」

天龍達の合流から待つこと十分弱——約十キロ南の海上が震えた。

朝陽に照らされた水面に陰影が現れ、巨大な潜水艦が波間を割って浮上する。

全長は二二〇メートル弱、全幅は五〇メートルぐらいか。ライトグレーの耐圧殻で船体を覆った潜水艦は、シロナガスクジラを優に十倍も上回る巨体であった。

民間軍事会社『海神』の保有する最大戦力——強襲揚陸潜水艦『海神』だ。

傭兵艦娘に帰る鎮守府はない。どんな依頼も報酬次第で請け負い、あらゆる海域に出没しながらも仕事を終えたら影のごとく姿を消す。最強にして唯一の傭兵艦隊。

——影の艦隊。彼女達を知る者はそう呼んでいた。

長門が吸い殻を弾き捨てる。

「撤収だ。各自、帰還したら入渠を済ませて身体を休めておけ」

各々が応答し、船体前部の耐圧殻が開いた母艦へ帰投し始めた。暁に染まりゆく地平線とコバルトブルーの海を眺めていると「おーい、古鷹！」と天龍の急かし声がする。

古鷹は紫煙を燻らせ、朝陽の眩しさに背を向けた。

——今日も勝ったよ。加古。

20 第一章 影の艦隊

1

強襲揚陸潜水艦“海神”の整備班は忙しげに格納庫を往き来する。地味なネズミ色のワークキャップと作業着を着用した整備員は女ばかり。が、体格や背丈は色々だ。

ただ、容貌は様々な艦娘と似ている。彼女達は“非戦闘用艦娘”という戦闘以外の業務を専門とする艦娘だ。が、モデルは同じなので顔立ちは必然的に似通ってしまう。

とはいえ、それぞれの性格や好みは個体差がある。知識、技能、容姿は統一規格で調整されるものの、あとは人間と同じなのだ。例えば、川内型軽巡的那珂をベースに建造した場合、アイドル業を鼻で笑う那珂もいれば、喧嘩っ早い短気な那珂も生まれる。

どうして性格は統一されなかったのか？ ドッペルゲンガー現象のような同型艦娘の接触時に起きる矛盾を避けるため、あるいは開発者の気まぐれ、など憶測は多々ある。

きつと本当の理由は、艦娘の開発者のみぞ知るといったところだろう。

古鷹は長門の半歩後ろを影のごとく付き従って歩く。長門が格納庫を進むたび、整備班の面々が足を止め、「お帰りなさい。代行」「お疲れさまです。長門代行」と一声かけては各々の作業場へ散っていった。この艦隊で長門の主な肩書きは二つである。

民間軍事会社『海神』の社長から、遊撃艦隊群の全権を任された『提督代行』であり、遊撃艦隊群を統率する『総旗艦』だ。なお、第一艦隊は彼女の直轄艦隊であった。

ちなみに『海神』の社長は、元帝國海軍の少将だ。横須賀鎮守府の提督だったようで、秘書艦かつ艦隊旗艦だった長門は、少将の起業に呼応して軍を抜けたらしい。

長門は帰還してから、海軍軍服の上着を肩へ羽織っている。長門本人から直に聞いたわけではなかったが、古鷹も彼女の着が誰の物だったかぐらいは勘づいていた。

傭兵艦娘は誰でもどこかの鎮守府にいた。だが、今はそうじゃない。

『海神』の本社は『帝都・東京』にあるが、帝國海軍が制圧した地域なら一店舗は必ず支部がある。遊撃艦隊群が各地へ赴いた際のサポートが仕事で、補給、整備、情報収集を主な業務とする。当然、各支部にも傭兵艦娘がおり、地域毎の依頼をこなしていた。

長門は手振りで「ご苦労」と応えつつ、那珂そっくりな顔の整備員へ尋ねた。

「ちようどいい。明石はいるか？」

「明石班長ですか？ さっきまで近くにいた気がしますけど……」

「……ふむ。明石！ 明石はいるか！」

バタバタと足音が聞こえ、長門と古鷹が振り返る。たつぷり工具を差した腰袋やポーチを腰へ巻き、小型クレーン付きの特殊艀装を背負ったピンク髪の艀娘が駆けて来た。

工作艀・明石。『海神』整備班の班長であり、本社の技術開発課の課長だ。

「すみませーん！ お待たせしまつ、わわっ！」

長門がコケる寸前で支えてやり、明石は羞恥心で頬を染めた。

「……お手数かけます」

「うむ。明石、輸送艀の件はどうなっている？」

「あ、その件ですね。積荷のサルベージなら終わりましたよ。えーとですね……」

小脇へ抱えていたタブレット端末を操作する。帝國海軍の追加依頼ではないが、明石の提案で輸送艀二隻へ積まれていた物資は『海神』に回収されていたのだ。

もちろん、善意で行った回収じゃない。明石の勿体ない精神が物資投棄を許さず、敵に食わせるなら回収しようとなったのだ。で、私達でありがたく使いましろう、と。

明石が積荷リストを見せて活き活きと説明した。

「なかなか大量ですよ。ほぼ鋼材とボーキサイトは無傷でゲットですね。海水に浸かって湿気ちゃった弾薬も多いですがまずまず。燃料もそれなりでしょうか。缶詰製品、煙草、

お酒を含めた飲料系、医薬品……あ、衣類の大半は消し炭になってます」

「備蓄状況は？」

「戦闘物資ですね。現在のペースだと一ヶ月ギリギリですよ。ただし、第二、第四艦隊の皆さんを常時動かすつもりなら二週間で底を尽きます。どう節約しても三週間は持ちません。そろそろ、補給が必要ですね。で、長門さん。実は願いがありました……」

「なんだ？」

胡麻をするように手を揉み、明石が猫撫で声を出した。

「回収物資。私の取り分は七割で……」

「またか。この前も言っただろう」

「長門さ〜ん！ お願いますよ〜！」

「却下だ。一人で半分以上も持って行く奴があるか……」

「そこをなんとか！ お酒と煙草はお安くしますから！ ダメですか？」

長門の呆れ顔を横目に見やり、古鷹も思わず苦笑いを湛える。

明石さん。今月、苦しいのかな……？

彼女は技術力を買われている傭兵艦娘だ。なので、他の傭兵艦娘と違って撃沈した敵の等級に応じたボーナスは出ない。つまり、固定給と一部手当しか受け取れないのだ。

そこで、明石は艦内で酒保じみた商売をやっていた。燃料、弾薬など戦闘物資を除いた嗜好品、日用品、食料品、個別の武装改造や修理すら金額次第で請け負っている。

その商品はどこで仕入れるのか？

大抵は、各支部や本社へ発注書を出し、戦闘物資の補給時にまとめて届けられる。でも、それでは調達資金がかかる。そこで、こうしてタダで仕入れられる物資を大量に確保しておき、元手を減らすことなく売上を出そうという魂胆なのであった。

そのため、取り分の交渉は食い下がる。自分の収入へと響くからだ。

長門が「めんどくさい」と言いたげに溜息をついた。

「五割だ。ただし、酒、煙草は値段を下げるように。いいな」

「……むむむ、まあ半分貰えたので良しとします。ところで戦闘物資はどうします？」
すると苦々しい表情で背後をチラッと窺った。

「こちらで使ってしまいたいところだが……そうもいかないだろう？」

古鷹達もつられて振り向き理解する。艦内エレベーターの右に黒髪の軽巡艦娘がいた。明石と同じ種類のセーラー服だが、そこらはアンダーリムの眼鏡を掛けている。

長門の肩越しで意味を悟り、明石も「そ、そうですねえ」とあっさり引き下がった。

「……どうします？ 海に放り出しますか？」

「燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイトは分けておけ。その他はどうにかする」

「了解しました。では、私はこれで……」

と、そそくさと逃げるように去った。明石が引き潮のごとく退いた理由はすぐ明らかとなるだろう。正直、古鷹も立場さえ許すなら回れ右して立ち去りたい気分だった。

長門とエレベーターに乗ると、大淀型軽巡洋艦・大淀が非難めいた視線を浴びせる。

「呆れましたね。我が軍の救援に赴いたフリをして物資泥棒ですか？」

「有効活用と言ってもらいたいものだな。大淀」

「物は言いようです。お使いになるなら相応の対価を払っていただきます」

「戦闘物資は返却してやるとも。ただし、貴様ら自身で運ぶことだ」

「……いいでしょう。回収を手配しておきます」

ドアが閉まり、大淀は長門の左へ控えた。

「ご苦勞様でした。今回の件、参謀本部は概ね満足しています」

「だろうな。でなければ、貴様が劳いなど口にするはずがあるまい」

「偏見ですね。ともかく報酬は予定通りです」

エレベーターの狭い空間に、ぴりぴりと緊張感が漂う。この艦隊の長門と大淀は極めて仲が悪い。お互いに対する皮肉と毒舌が、二人の基本的な日常会話であった。

この不仲な原因は、大淀が帝國海軍參謀本部から出向したお目付役だからだ。特務監察艦・大淀。『海神』と『影の艦隊』を監視する海軍の艦娘である。

彼女は他の傭兵艦娘からも好かれていない。まだ愛想の一つでも振り撒いていたなら関係も改善しそうなものだが、お堅い委員長タイプの性格では望むべくもなかった。ちなみに、天龍などは「クソ眼鏡」と罵り、大淀を毛嫌いしている。

長門が冷めた表情で腕を組む。

「そうか。で？ 貴様の用件はそれで終わりか？」

さっさと失せろ。言外にそう告げる乾いた声だ。が、大淀は氣にも留めない。クリップボードサイズのタブレットを操作し、何かの報告書と思しきデーターを表示した。

「參謀本部は新しい依頼を出しました」

「なに？」

「今日の一件と似たような依頼です。深海棲艦を掃討していただきますが、今回は少しばかり趣旨が違います。參謀本部は御社に重要な任務を与えようと考えているのです」

「ほう。貴様も時には役立つ話を持って来るらしいな」

「私は相手に見合つた話をしているだけです」

エレベーターが二階で止まった。艦内は四層構造で一階の格納庫は最上階だ。



二階は、クルーの生活区画で各人の部屋や入渠用の大浴場などがまとまっている。大淀が降りて振り向いた。

「御社から後ほど連絡があるでしょう。では、失礼します」

エレベータードアが閉まり、微弱な振動を伴って再び動き出す。

古鷹がホツと胸を撫で下ろし、長門は眉尻を下げて素直に詫びた。

「すまないな」

「大丈夫ですよ。これでも慣れましたから」

「……しかし、今度は海上護衛でもやらせるつもりか？ どう思う、秘書艦？」

古鷹には「秘書艦」という立場がある。長門の仕事全般を補佐する役職であり、戦闘においては護衛の仕事も担っていた。古鷹は少し考えてから見解を述べる。

「それなら自前で用意するんじゃないでしょうか？ 費用対効果も良くないですし」

「とすれば、やや厄介な案件かもしれんな」

「……社長が断るのでは？」

「あの男は無茶はしても無理はしない。無理なら断っただろう」

三階でエレベーターが止まる。三階は、第二格納庫、武器庫、ブリーフィングルーム、そして発令所がある。なお、機関室や魚雷の発射管室は全て四階に配置されていた。

長門と直線の廊下を進み、暗証番号を押して分厚いドアを潜る。発令所はU字型フロアとなっており、発令所要員の席やコンソールの類は一段低い壁際へ並んでいた。

ゴツイ椅子が発令所の中央にある。長門が背もたれに手をかけて尋ねた。

「どうだ、陸奥。状況は？」

「あら、長門。お帰りなさい」

やや跳ね癖のある甘栗色のショートヘアを揺らし、長門型二番艦の陸奥が顔を上げる。

「平穩そのものよ。何にもないわ」

陸奥は強襲揚陸潜水艦“海神”の艦長だ。古鷹が知る限り、長門と同じ横須賀鎮守府の艦隊に所属していたという。長門の可愛がる妹艦であるのは言うまでもない。

「そうか、と長門は頷いて言づけた。

「陸奥。通信ブイの回収は少し待て」

「あら？ 本社？」

「ああ。とりあえず近場の支部で補給を受ける」

「じゃあ、パラオね。進路一八〇〇、深度三〇〇〇。潜行始め」

——進路一八〇〇、深度三〇〇〇。潜行始め！

陸奥の命令が復唱され、操舵士が操縦桿を倒して潜行させる。

一方、古鷹は長門と下段へ降りてゆく。そちらに重要な人物がもう一人いるのだ。影の艦隊のブレーン——すなわち作戦参謀である。

KANTAI COLLECTION SHADOW FLEET

－ 影の艦隊 －

■発行日■

2017 年 12 月 31 日 (C93) 初版第 1 刷発行

■著者・編集■

黒ねこ作

Twitter (@gretelproject)

Email : projectblackcat2011@gmail.com

■表紙・挿絵■

ただのサボテン

Twitter (@yue0313)

■装丁デザイン■

舩木渡 (舩木同人ワークス)

<http://funakidw.com>

■印刷所■

株式会社ちょこっと (ちょ古っ都製本工房)

<http://www.chokotto.jp>

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。
また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。



SHADOW FLEET - 影の艦隊 -
YORODUYA HONPO
KANTAI COLLECTION FANBOOK

